

12回連載 エッセイ 第3話 「酒の席での話はコワイ？」

徒然なるまま



安永暢男（元東海大学教授）

本学会の専門委員会の一つに「次世代固定砥粒加工プロセス専門委員会（委員長：池野順一埼玉大学教授）」がある。筆者も運営委員の一人として参加している。この8月に上智大学四谷キャンパスで開催予定の次回講演会が、2005年の発足以来丁度50回目の節目の研究会となるので、研究会終了後の技術交流会（懇親会）を、「50回記念パーティー」と銘打ち、近隣の有名ホテルを借りて多少リッチな気分で盛り上げようということになった。定例の技術交流会に比べて倍以上の出費が予想されるとのことで、質素な運営を旨とするこの専門委員会としてはそうそう簡単に了承される話ではないのだが、年間予算をやりくりすれば何とかかなりそうだという会計幹事と委員長の了解も得られて、最終的には運営委員会の全会一致で承認された。

実はこの一寸贅沢なパーティー案、元と言えば企画担当の運営委員の方が、別の懇親会の席で酔った勢いで口走ったのがその発端になったとのこと。酒の席ではつい気が大きくなって、シラフでは口にする事のないような“デカイ話”をして、周囲のひんしゆくを買ったり、酔いが醒めてからシマッタと後悔することもままあるが、逆に後で冷静に考えてみても案外と建設的で面白いアイデアとして評価される例も結構多いのではなからうか。この記念パーティー案も後者の一例のように思えるのだが…。

砥粒加工学会の重要イベントの一つにISAATがある。今年でもう16回目になるという。このISAATも元をただせば、酒の席で冗談半分に飛び出した一寸デカイ話から始まったように記憶している。

本学会の学術講演会であるABTECが始まったのは1988年のことで、当初は、本学会の有力者が在籍している明治大学、上智大学、青山学院大学、都立大学など東京近郊の大学で開催されていた。第4回か第5回ABTECの際の懇親会の席ではなかったかと思うが（或いはその年の学会忘年会だったかも知れない）、何人かがワイワイ話している輪の中で、「ABTECもたまには地方でやりたいね」という声が上がった。その場にたまたま沖縄出身の方が居られるのを見て誰かが、「沖縄でABTEC、というのもイイね」と冗談混じりに言った。その場に居合わせた皆さん口々に賛成されたのだが、やがて話題が旅費の話に移ると、今は沖縄よりも韓国のほうが安く行ける、韓国で開催という可能性もあるのでは、という別の意見が出てきた。バブル景気に押されて航空運賃も下がり、国内便よりも安い国際便も運航され始めた時代である。アルコールが入ってハイな気分になっている皆さん、イイねイイねと賛成されてその日の懇親会は終わったように記憶している。

この“酒飲み話”が後日、ABTECの国際版を韓国で開催しようという極めて真面目

な企画に昇華し、理事会マターとして実現に向かって動き出した。須藤徹也氏（工業技術院機械技研）や大森整氏（理研）など、砥粒加工分野で韓国の大学や研究所に太いパイプを持つ先生方のご協力も頂き、Korea Association of Machining Engineers との共催の形で 1993 年 11 月にソウルの KAITECH で開催したのが第 1 回国際 ABTEC である。40 件近い講演発表の内 30 件以上が日本からという実態からもわかるように、国際会議とはいえ、国内 ABTEC の延長程度の規模でしかなかったが、本学会が主体的に国際協力事業に乗り出す原点となった、という意味でも“酒の席で生まれたアイデア”の意義は極めて大きかったといえるだろう。

さて第 2 回国際 ABTEC は、その 2 年後に鈴木清氏（日工大）や大森整氏などのご尽力により、中華民国磨粒加工学会との共催で、台湾新竹科学園區の工業技術研究院において開催されるに至った。90 件近い講演発表があり、日本からも数十名以上が参加する大変盛況な国際会議となった。

韓国、台湾に続く第 3 回目は中国で、という期待が自然と生れ、97 年に上海で開催、という目標で動き出したのだが、先方との交渉がうまく進まずに頓挫してしまった。

そんな頃、シドニー大学の若い研究者から、筆者の研究論文が欲しいとのメールが届いた。もし OK なら滞在先のカナダからの帰路日本に立寄るので会いたいという。『オーストラリア』も国際 ABTEC の開催候補地として既に名前があがっていたので、飛んで火に入る夏の虫、シドニー大学で開催できないだろうかと持ち掛けてみた。上司の L.C. Zhang 氏に相談してみる、と言い残して帰国されたが、後日届いた返信に、オーストラリアにはこの分野の研究者が



第 1 回国際 ABTEC における参加者記念写真

少ないので、“Conference”となると厳しいけれど、“Symposium”程度であれば協力出来ないこともない、とあった。当初予定していた中国開催の目途が立たない中、この申出を渡りに船とばかりに有難く受入れて、早速実施に向けて動き出した。これが 1997 年 7 月に冬のシドニー大学で開かれた最初の International Symposium on Advances in Abrasive Technology (ISAAT'97; このネーミングは L.C. Zhang 氏の発案による) の開催経緯である。この時の発表件数は 40 件程度と確かに小規模ではあったが、日豪のほか中国、韓国、台湾、米国、インドなどからのエントリーもあり、前 2 回の国際 ABTEC にも増して国際会議らしい雰囲気、シンポジウムとなったのは収穫であった。

国際 ABTEC の方は第 3 回が 1999 年にブリスベンで開催されたのを最後に ISAAT に統合され、その後は ISAAT が世界規模の国際会議として毎年開催されるほどに発展定着しているようである。その“出生”に関わった一人として誠に喜ばしい限りである。

だから酒の上の軽口もまんざら捨てたもんじゃないでしょ、というのが飲兵衛の一人としての勝手な言い草ではある。8 月の「50 回記念パーティー」でまたどんな軽口が飛び出すか、講演会の真面目な話よりも正直なところこちらのほうを楽しみにしている、といえは主催者に叱られるか…。